



# 重症心身障害児施設「第一びわこ学園」における 「発達保障」の思想と実践

垂髪, あかり

---

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 10(1):17-29

(Issue Date)

2016-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81009714>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009714>



# 重症心身障害児施設「第一びわこ学園」における「発達保障」の思想と実践

## Thought and Practice of “Guaranteeing the Right of Development” for Children with Severe Motor and Intellectual Disabilities in Daiichi Biwako Gakuen

垂髪 あかり\*

Akari UNAI\*

**要約：**糸賀一雄（1914-68）という人物の思想・理念として語られてきた「発達保障」を、糸賀らが1963年に創設した「第一びわこ学園」（旧「びわこ学園」／現「びわこ学園医療福祉センター草津」）という重症心身障害児施設の50年余にわたる療育の創造と展開にそくして、その思想と実践を再検討した。「第一びわこ学園」では、「療護児」から「重症児」、さらには「超重症児」へと対象者が質的に変化するなかで、療育思想や実践内容が変遷している。すなわち、近江学園時代の「療護児」や「びわこ学園」創設初期の「重症児」への実践において見出された「ヨコへの発達」「重症児の生産性」（1953～1966年）という考え方から、対象の重症化とともに「いのち」「快」「関係」の保障という新たな視点が産み出された（1967～1978年）。そして、ノーマライゼーションを背景に、「重症児」であっても「ふつうの生活」を保障することが目指されていく（1979～1994年）。さらには、「超重症児」の受け入れにより、「QOL」重視の実践へと移行している（1995～2014年）。その過程で吟味され今なお学園が大切にしている「発達保障」の思想と実践とは、1950～1960年代に糸賀らが「発達保障」思想を共創する過程で出発点とした「内面」「生きるよろこび」「生き方」「自己実現」であり、今では「生きることが光になる」と要約されている。

**キーワード：**重症心身障害児、「第一びわこ学園」、「発達保障」、療育実践史、対象の質的変化

### 1. はじめに：課題・対象・方法等

#### （1）課題・対象・方法

障害児者の「発達保障」理念は、糸賀一雄（1914-68）らが設立した近江学園（知的障害児施設、1946年）の『年報』第9号（1961年<sup>1)</sup>）においてはじめて提起された。その理念を掲げて1963年に創設された重症心身障害児施設がびわこ学園である。

「発達保障」思想に関しては清水寛の先行研究がある。清水は、糸賀の「発達保障」の立場に立つ社会福祉思想について、1970年代後半から1980年代初頭にかけて3つの論文を発表している（清水1976：pp.435-516）（清水1978：pp.38-66）（清水1981：pp.157-248）。

これらの論文では、共通して糸賀一雄の福祉思想としての「発達保障」理念の形成をテーマに扱っているが、時期を経るごとに若干の構成の変更、修正等がなされている。その相違を簡単にまとめると次のとおりである。

清水（1976）では、糸賀一雄の障害者福祉思想の発展過程を近江学園の歩みと教育体制の推移と併せて検討し、糸賀自身の内面変革のプロセス——つまり、学園実践における障害のある子どもの「いのち」や「人格的価値」への気づきのなかで、自らの重症児観や生産概念の変革を成し遂げていくプロセスを、「発達保障」

理念の創出とあわせて解明している。また清水（1978）では、清水（1976）において課題とした「発達保障」の立場にたつ福祉思想を、その「確立期」に絞り、特に「共感」概念の形成過程を分析している。清水（1981）では、清水（1976）と清水（1978）とを統合させ整理し直す形で、近江学園創設前史から糸賀園長逝去までの30年間の実践・研究の歩みと、糸賀の「発達保障」理念の成立過程とをあわせて検討した。そして、糸賀の「発達保障」理念及び思想が、近江学園やびわこ学園初期等の実践と研究の蓄積と発展を通して成立し、とりわけ「共感」概念の形成が「発達保障」理念の成立の基盤となっていたことを解明した。

清水は「どのように障害の重い者でも『人間の人格性』という一点において『共感』しあい、高めあうこと」（清水1981：p.235）をすべての取り組みの基礎にすえて行われた近江学園「杉の子組」やびわこ学園初期の「重症心身障害児」への療育実践と研究の成果として、「生命の尊厳」と「人格的価値」を基盤とする糸賀の「発達保障」理念が確立するに至ったことを明らかにし、「発達保障」思想の形成過程研究を大きく前進させたと言える。

しかし一方で、清水の研究にはいくつかの課題が残されている。その1点目は、清水が対象としたのは糸賀の福祉思想としての「発達保障」とその背景である近江学園の実践であり、糸賀とその他

\* 日本学術振興会特別研究員、神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程後期課程

（2016年3月31日 受付）  
（2016年7月1日 受理）

の学園中心人物との関係性には言及されていないことである。2点目は、清水が対象とした期間は近江学園前史としての1930年代後半から糸賀が逝去する1968年までであり、それ以降の実践の展開については未解明であることである。そして3点目は、清水が分析に用いた資料は主に近江学園からの公的報告書である『近江学園年報』であり、糸賀やその他の中心人物の著作物及び未公開の実践記録、報告等と合わせて検討していくことが必要である。なお、この点については清水も自身の課題として挙げている。

さらに、清水が糸賀の「発達保障」思想の形成において重要とした「重症心身障害児」への療育実践について、1968年以降の展開を解明していくことが最大の課題であると言える。確かに、清水は「重症心身障害児」への療育実践としてびわこ学園の初期を扱ってはいるが、清水の研究を一步進めるためには、対象を近江学園からびわこ学園へとシフトさせ、1968年以降のびわこ学園における療育の展開について解明していく必要がある。そして近年、再び糸賀の「発達保障」に論及した清水が、現代的な問題を加味して、改めて「重症心身障害児の超重症化」(清水2013: p.184)に対応した「実践と研究と運動」との連携の必要性を指摘したことを踏まえると、対象の変化に即したびわこ学園の実践史を解明していくことが要請される。

次に、びわこ学園を対象とした研究、とりわけ学園実践における療育観や発達観、「発達保障」を取り扱ったものでは、斉藤文夫(斉藤1977: pp.1-9)、市原邦雄(市原1974: pp.74-87)、森博俊(森1982: pp.21-33)の研究がある。三者は共通して1960年代後半から1970年代の「健康増進」の取り組みの内実や思想、課題について検討しており、本実践が重要な意味を持つことを示唆している。また、療育記録映画「夜明け前の子どもたち」(1968年)を取り上げ、保育の実践課題と関連させながら論じた森敏樹(森1971: pp.138-161)の研究や、遠藤六朗(遠藤2006: pp.57-72)によって学園の事例を物語として再構成することを通して「発達」について検討したもの等がある。

こうした研究は、実践内容とその背景にある療育思想を検討しており、特に1960年代後半から1970年代前半の近江学園や「第一びわこ学園」における療育観形成の解明に示唆的である。一方で、時期が限定されており、1970年代から現在に至るまでの「発達保障」の思想と実践を扱った研究は管見の限り見当たらない。

そこで本稿では、これまで先行研究が扱ってこなかった次のような視点から、「発達保障」思想の核となる「重症心身障害児」の「発達保障」に迫り、「第一びわこ学園」という重症心身障害児施設の50余年にわたる療育の創造と展開にそくして、その思想と実践を再検討する。すなわち、1) 糸賀一雄(近江学園初代園長)単独ではなく、糸賀とその他の学園中心人物(岡崎英彦一びわこ学園初代園長、田中昌人一近江学園研究室主任)との関係性による「発達保障」思想、2) びわこ学園及び「第一びわこ学園」設立から現代に至るまでの約50年間に渡る療育実践やそこにおける「発達保障」の思想・理念の変遷、3) 「超重症児」を含んだ「発達保障」、4) びわこ学園からの公刊書物である『年度報告』、『年報』、『記念誌』に加えて、これまでびわこ学園から発行されてきた会報としての「びわこ学園だより」や、未公開の「第一びわこ学園『病棟総括集』」にまで分析対象を広げる、の4点である。分

析した資料一覧を表1に示す。

## (2) 「療護児」「重症心身障害児」「超重症児」の定義及び時期区分

本稿では、「療護児」から「重症心身障害児」、そして「超重症児」へという対象児の質的变化を含む50余年にわたる「第一びわこ学園」の療育実践史と、そこにおける「発達保障」の思想と実践を再検討する。

「療護児」という用語に対して、公的な定義はなされていない。近江学園では、1953年、神経性下痢と診断された男児の医局入室を契機とし「医学的な処置のみならず教育心理学的な措置」の必要性から「杉の子組」が編成され、対象児を指す言葉として「療護児」が初めて使用されたとみられる<sup>2)</sup>。公的には、身体障害者福祉法(1949年制定)において「心身障害者療護施設」の定義のなかで「療護」は、「治療及び養護」と意味付けられている。

「重症心身障害児」(以下、「重症児」とする)は1963年「重症心身障害児療育に対する次官通達」として、入所基準、療育費等を定めた「重症心身障害児療育実施要項」のなかではじめて公的に使用された言葉である。1967年児童福祉法一部改正によって重症心身障害児施設が規定され、「重度の精神薄弱及び重度の肢体不自由が重複している児童」と定義された(第43条の4)。

「超重症児」という用語に対して公的な定義はなされておらず、その概念は、継続的濃厚医療を基準とした介護度の評価から成立している。1995年にわが国で初めて「超重症児」を定義した鈴木は、「重症児」に対して一般的に用いられる「大島の分類」とは異なった観点から、「超重症児」を「長期に継続する濃厚な医療ケアを必要とする子どもたち」であり「人工呼吸器や気管切開、吸引や酸素療法などの呼吸管理や中心静脈栄養などを継続して必要とし、それが常態であるという子どもたち」とした。そして、その判定に「超重症児スコア」を用い、運動機能は座位まで、呼吸機能、食事機能など各項目のスコアの合計が25点以上が6ヵ月以上続く場合を超重症児(者)とした(鈴木1995: pp.406-410)。

本稿2.では、「療護児」への実践が開始された1953年から「重症児」が法的に定義付けられる前の1966年までと設定し(第1期)、近江学園「杉の子」組とびわこ学園初期の実践と療育思想を、それらを率いた中心人物(糸賀一雄、岡崎英彦、田中昌人)の思想と併せて検討していく。3.では、法的に規定された(1967年)「重症児」への療育を「超重症児」が初めて定義付けられる前の1994年までと設定し(第2期)、「第一びわこ学園」の療育内容からさらに2つに分けて療育思想が深化した過程を論じる。そして4.では、1995年(超重症児の規定)から2014年までを扱い、「超重症児」を含んだ「第一びわこ学園」の実践と思想の展開について論じる。すなわち、対象の変化として大きく3期に区分し、そのなかで療育内容にそくして第2期をさらに2つに分けて、計4期に区分する(表1)。

## (3) 用語の整理

びわこ学園は1966年に「第二びわこ学園」が増設され、「第一びわこ学園」「第二びわこ学園」と改称された。その後、それぞれ1994年に「びわこ学園医療福祉センター草津」、「びわこ学園医療福祉センター野洲」に名称変更したが、本稿では歴史的用語として「第一びわこ学園」を用いる。また、総称する場合や66年以前の学園を指す場合は「」を外してびわこ学園と表記する。本稿で

表1 びわこ学園における療育と分析資料一覧(1953-2014)

| 時期・該当章・年 <sup>1)</sup>        | 主要事項 <sup>2)</sup>                                       | 療育観に係るキーワード <sup>3)</sup>                  | 資料 <sup>4)</sup>                                                                      |
|-------------------------------|----------------------------------------------------------|--------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| 第1期(対象…「重<br>症児」)             | 2.「発<br>達<br>保<br>障<br>の<br>源<br>流」                      | 1953 近江学園「杉の子組」編成                          |                                                                                       |
|                               |                                                          | 1954                                       |                                                                                       |
|                               |                                                          | 1955                                       | 「療養児」「驚くほどの伸び」「主観性」                                                                   |
|                               |                                                          | 1956 田中昌人着任(近江学園研究部)                       | 『近江学園年報』第7号                                                                           |
|                               |                                                          | 1957                                       |                                                                                       |
|                               |                                                          | 1958                                       | 「感ずる世界」「意欲する世界」「人間の生き甲斐」「心」                                                           |
|                               |                                                          | 1959 「杉の子組」が「床組」「絵組」に再編成                   | 『近江学園年報』第8号                                                                           |
|                               |                                                          | 1960                                       |                                                                                       |
|                               |                                                          | 1961 近江学園「発達障害」提起                          | 「発達ということ」同時に「個性化の方向をもつ」「内面性<br>という面からの非規性」「発達障害」                                      |
|                               |                                                          | 1962                                       | 『近江学園年報』第9号                                                                           |
| 第2期(対象…「療<br>護児」から<br>「重症児」へ) | 3.「重<br>症<br>児」<br>療<br>育<br>の<br>深<br>化                 | 1963 びわこ学園設立(岡崎英彦初代園長)                     | 『近江学園年報』第10号                                                                          |
|                               |                                                          | 1964                                       | 「いのち」と相対する」                                                                           |
|                               |                                                          | 1965                                       | 『近江学園年報』第11号                                                                          |
|                               |                                                          | 1966 第二びわこ学園開園                             | 「発達障害への指向、療育者と子どもの「育ち合う関係」<br>を通して「よこ」育ち」を追求                                          |
|                               |                                                          | 1967 児童福祉法一部改正で重症心身障害児施設の規定                |                                                                                       |
|                               |                                                          | 1968 映画「夜明けの子どもたち」完成<br>永賀一雄逝去             | 「しもちゃん」の「笑顔」「関係の育ち」                                                                   |
|                               |                                                          | 1969 北・南の2病棟制実施                            | 療育記録映画「夜明けの子どもたち」                                                                     |
|                               |                                                          | 1970 職員の大規模異動実施                            | 『詳細的健康管理』から『健康管理』へ<br>「ベッドからプレイルームへ」「プレイルームから戸外へ」<br>「ベッドの子ども」に対する全面発達に働きかける療育<br>実践を |
|                               |                                                          | 1971                                       |                                                                                       |
|                               |                                                          | 1972 職員不足深刻化、療育に影響                         |                                                                                       |
|                               |                                                          | 1973 一病棟制実施、職員増員                           | 虚勢児の「うさぎグループ」誕生                                                                       |
|                               |                                                          | 1974 二病棟制に戻る                               | 「ベッド生活における豊かさ」「最も快適な状態をつくり<br>出す」「問題行動を発生要求として」                                       |
|                               |                                                          | 1975 病棟全体で発達観察記録集編成                        | 「発達観点をあてた活動」を                                                                         |
|                               |                                                          | 1976                                       | 「生活の見直し」「ベッド生活の多様性」                                                                   |
|                               |                                                          | 1977 高谷清昭着任(常勤)、施設保育へ傾斜                    |                                                                                       |
|                               |                                                          | 1978 15周年記念式典、年報発刊開始                       | 『1976年度報』<br>『創立15周年記念誌 びわこ学園の15年 1963-1978』<br>『1977年度報』                             |
|                               | 「療<br>育<br>の<br>深<br>化」<br>／<br>「療<br>育<br>の<br>広<br>がり」 | 1979 養護学級通学開始、年少重症児入園、緊急・一次・短<br>期入園受け入れ開始 | 『昭和53年度報告』<br>『1978年度報』                                                               |
|                               |                                                          | 1980 「私たちの障害児療育の理念」提起                      | 「生命を守りつめ、健康をつくる」                                                                      |
|                               |                                                          | 1981 「私たちの障害児療育の理念」提起                      | 「いのちを守り、いのちを強める」                                                                      |
|                               |                                                          | 1982 高谷清昭、欧州視察                             | 「最も快適な状態をつくる」                                                                         |
|                               |                                                          | 1983 在宅療育療育センター機能                          | 「快、不快の両面を受けとめる」                                                                       |
|                               |                                                          | 1984 入園児の重症化、園生の高齢化<br>高谷清第二代園長就任          | 「人との関係」「生きる力への共感と要求、反応をとらえ<br>る」                                                      |
|                               |                                                          | 1985 北病棟・棟制実施                              | 「快、不快をみきわめ、快適な状態をつくっていく」「活<br>動と安静のリズム」                                               |
|                               |                                                          | 1986                                       | 「生きる意欲・力」                                                                             |
|                               |                                                          | 1987 岡崎英彦逝去、『抱きしめてBIWAKO』                  | 『昭和54年度報告』『1979年度報』                                                                   |
|                               |                                                          | 1988 園生高齢化による積極的な医療援助の必要性が明<br>確化          | 『昭和55年度報告』『1980年度報』                                                                   |
|                               |                                                          | 1989 杉組より向うへの準備                            | 「快、不快の両面を受けとめる」                                                                       |
|                               |                                                          | 1990 杉組より向うへ日課の見直し                         | 「人との関係」「生きる力への共感と要求、反応をとらえ<br>る」                                                      |
|                               |                                                          | 1991 草津・杉組、看護師不足で二病棟体制                     | 「快、不快をみきわめ、快適な状態をつくっていく」「活<br>動と安静のリズム」                                               |
|                               |                                                          | 1992 三病棟体制実現                               | 「生きる意欲・力」                                                                             |
|                               |                                                          | 1993                                       | 『昭和56年度報告』『1981年度報』                                                                   |
|                               |                                                          | 1994 「超重症児」への対応、職業再発                       | 『昭和57年度報告』『1982年度報』                                                                   |
| 第3期(対象…「重<br>症児」・「超<br>重症児」)  | 4.「超<br>重<br>症<br>児」<br>を<br>含<br>ん<br>だ<br>療<br>育       | 1995                                       | 『創立15周年記念誌 びわこ学園の15年 1963-1978』<br>『1977年度報』                                          |
|                               |                                                          | 1996                                       | 『昭和58年度報告』『1983年度報』                                                                   |
|                               |                                                          | 1997 人工呼吸器装着児の入園、高谷清昭、口分田政夫<br>第三代園長就任     | 『昭和59年度報告』『1984年度報』                                                                   |
|                               |                                                          | 1998                                       | 『昭和60年度報告』『1985年度報』                                                                   |
|                               |                                                          | 1999                                       | 『昭和61年度報告』『1986年度報』                                                                   |
|                               |                                                          | 2000 サービス支援体制に向けた組織体制                      | 『昭和62年度報告』『1987年度報』                                                                   |
|                               |                                                          | 2001                                       | 『昭和63年度報告』『1988年度報』                                                                   |
|                               |                                                          | 2002 「びわこ学園の理念」提起                          | 『昭和64年度報告』『1989年度報』                                                                   |
|                               |                                                          | 2003 「個別援助プログラム」導入                         | 「命を守ること、生活を豊かにすること」                                                                   |
|                               |                                                          | 2004                                       | 「命を守ること、生活を豊かにすること」                                                                   |
|                               |                                                          | 2005                                       | 「命を守ること、生活を豊かにすること」                                                                   |
|                               |                                                          | 2006 自立支援法施行                               | 「命を守ること、生活を豊かにすること」                                                                   |
|                               |                                                          | 2007 施設の名義変更                               | 「命を守ること、生活を豊かにすること」                                                                   |
|                               |                                                          | 2008 利用者の重症化、高齢化が顕著に                       | 「命を守ること、生活を豊かにすること」                                                                   |
|                               |                                                          | 2009                                       | 「命を守ること、生活を豊かにすること」                                                                   |
|                               |                                                          | 2010                                       | 「命を守ること、生活を豊かにすること」                                                                   |
|                               |                                                          | 2011 利用者の医療必要度がますます高まる                     | 「命を守ること、生活を豊かにすること」                                                                   |
|                               |                                                          | 2012 つなぎ法施行                                | 「命を守ること、生活を豊かにすること」                                                                   |
|                               |                                                          | 2013 緊急時対応を終末期に取り組む                        | 「命を守ること、生活を豊かにすること」                                                                   |
|                               |                                                          | 2014                                       | 「命を守ること、生活を豊かにすること」                                                                   |

注1) 1953年から2014年までを、対象による時期(第1期～第3期)と療育内容(実践と思想)による章(2.～4.)で区分した。

2) 近江学園「杉の子組」及びびわこ学園における園長就任や病棟体制などの主要事項、重症心身障害児者の福祉・教育等にかかわる動向を掲げた。

3) 療育観に係るキーワードを資料から抽出した(特記事項がない年度は空欄)。年報発行以前のキーワード(特に、資料発行のない1969年～1975年)については、『創立15周年記念誌 びわこ学園の15年 1963-1978』、『創立20周年記念誌 びわこ学園の20年 1963-1983』から抽出した。

4) 使用した資料は、『近江学園年報』、びわこ学園『年度報告』、『びわこ学園年報』、びわこ学園『記念誌』『びわこ学園だより』『病棟総括集』などであり、該当する年度に示した。「病棟総括集」については、残存している「うさぎグループ」の資料を中心に収集可能な範囲のものとした。

5) 「びわこ学園だより」については、1967年にNo.8が出された後11年間中断され、No.9が再刊されたのは1978年であった。No.9以降は毎年刊行されている。

用いる「精神薄弱」や「白痴」等の呼称については現在では用いられていないが、歴史的資料を尊重し、科学研究と今後の思想の発展を願う見地に立って出典を明記して原文通りとした。

## 2. 第1期：「発達保障」の源流（1953年～1966年）

### （1）近江学園「杉の子組」：療護児の「内面」に立ち入る

#### 【対象者の実態】

近江学園「杉の子組」は4名の「療護児」で編成された（1953年）。4名の主障害は神経症的傾向、てんかん、アテトーゼ、神経症と記されている（岡崎1955：pp.108-133）。「医学的な処置のみならず教育心理学的な措置」（岡崎1955：pp.108-133）を必要とし、クラスでの集団生活がほとんど不可能と考えられた児童たちであった。その後、新たに神経症、てんかん、自閉症児を加え、薬物療法や栄養面での配慮、教育心理面での実践が行われた（岡崎・伊藤・岩村・横田1958：pp.151-181）。

#### 【実践と思想の展開】

「杉の子組」を担当したのは後にびわこ学園の園長となる岡崎英彦医師であった。医局の片隅の狭い八畳の部屋に集められた彼らには、それぞれに違った問題や要求を持つなかで、日常生活、身の自立を目標にした生活訓練のほか、国語や算数、絵の指導等が行われた。子どもたちの身体・心理状態とのバランスをみながら、「手探り」で行われた実践であったが、発足から一年ほど経過すると、子どもたちは「変化」を見せ始めた。これについて岡崎は「子どもたちを指導するというよりも、子どもたちの毎日の反応にひきずり廻されたといった方が適当であろう」としながらも、「彼らは彼らなりにお互にもみ合って、一定の時期をすぎると驚くほどの伸びを示し、こちらは喜ぶやら、安心するやらということのくりかえしであった」（岡崎1955：pp.108-133）と驚きを記した。

また、近江学園園長の糸賀一雄は、「長い年月にわたって名伏せし難い困難と取り組んだ関係者の苦闘の記録である（中略）その背後に、大げさにいえば血みどろの生活があったことを、私は敢ていいたいのである」（糸賀1955：頁数記載なし）と評して子どもたちの見せた変化に驚き、取り組んだ職員たちに敬意を示した。そして、糸賀は障害の重い子どもへの教育の目的を、社会の役に立つことに置くのではなく、「もっと本質的に、この子どもたち自身の生きるよろこびを高める」（因幡1956：pp.2-4）ことに見出すようになる。

こうして、がむしゃらに取り組んだ「療護児」との三年余から、岡崎は「常に彼等の反応過程の内部に立ち入って指導の問題を考えてゆく」（岡崎1958：p.7）必要性を、糸賀は、「白痴も、肢体不自由児も、二重三重の障害の子どもたちも、だれひとりの例外なく、感ずる世界、意欲する世界をもっている。ただ生かしておけばよいのではなく、どのような生き方をしたいと思っているかを知り、語り合い、触れ合い、お互いにより高い生き方へと高められてゆくような指導」（糸賀1958：pp.1-17）の必要性を指摘した。

1956年、近江学園に研究室主任として田中昌人が着任した。田中は、「もっと人間存在の根源にあたるところから研究を組み立て直そう」（田中2006：pp.79-114）と意気込んでいた。当時、心理学における「精神薄弱児」研究では、「精神薄弱」児を外からみて

「できなさ」の特徴を把握する類型的研究が主流であり、それに対して田中は、発達心理学の立場から「子どもたちの心の一隅に、そっと芽を出している素朴な願い」に目を向け、「彼らを内面的に見る」ことにこだわっていた（田中1956〔大泉2011：pp.101-106〕）。

「杉の子」組の実践を通して、岡崎と糸賀はともに「療護児」の「内面」に立ち入り、語り合い、触れ合おうとし、彼らの「生きるよろこび」や「生き方」を問うていた。その姿勢は田中とも一致し、田中は精力的に発達過程の解明に向けて研究を進めた。そして、その成果として発達の「法則性」を把握し、「発達ということは同時に、個性化の方向をもつ」ことや「内面性という面からの法則性」を解明した（田中1961：p.223）。

こうした実践と研究の往還を通して、1961年、近江学園は「発達保障」を提起したのであった。

### （2）びわこ学園：「ヨコへの発達」と「重症児」における「自己実現」

#### 【対象者の実態】

「杉組」（「杉の子組」の改称）の6名の「療護児」が移動する形でびわこ学園は開設した（1963年4月）。同年8月までに「問題行動が強い」（岡崎1978：p.66）児や「重度の精神薄弱児」（岡崎1978：p.66）2名、さらに中度、重度の脳性麻痺を伴う子どもたちを受け入れて10月には20名となり、調子を崩す子どもたちに応援の医師を呼びようやく毎日が切り回されていた。その後も新入園児を次々と受け入れ、1965年には70余名に、「動ける子どもたち」とともに「ねたきりの子どもたち」（岡崎1978：p.70-81）、すなわち「重症児」も含まれるようになっていった。

#### 【実践と思想の展開】

糸賀はこの頃、重症心身障害児施設創設に向けて小林提樹（島田療育園創設者、1961年東京都に設立）、草野熊吉（秋津療育園創設者、1958年東京東京都に設立<sup>3)</sup>）らとともに国への訴えを繰り返していた。糸賀とともに重症児施設の創設を求めた小林提樹は、重症児とその家族がおかれた状況を悲観し、安楽に死を迎えられる施設としての重症児施設を希求した（小林1959：p.3）。島田療育園の病院組織の主張に対して、糸賀は初めて児童福祉法の体系のなかで「発達の保障」（糸賀1963：pp.13-16）を掲げ、びわこ学園はそれを実証する場として1963年の開設を迎えた。島田療育園に続く全国で二番目の重症児施設であった。

びわこ学園の園長となった岡崎は、職員たちと子どもたちの生きる道を切り開いていこうと意気込んでいた。一方、学園を支える財源は非常に不安定で、学園内外の諸設備もこれから整備していくという状態のなか、「暗中模索」の毎日が重ねられた。

開設から一年を経て出された「びわこ学園だより」創刊号には、子どもたちの「いのち」と「全力で相対する」（岡崎1964：p.1）岡崎の強い決意が示されている。また糸賀は、「風の中の灯のような生命も、その発達がしっかりと保障される仕組みを実現し、どんな生命も、生まれてきた甲斐があったことを、何らかの形で実証しなければならない。」（糸賀1964a：p.2）と訴えていた。岡崎や糸賀は、びわこ学園の運営に苦心しながらも、「療護児」や「重症児」たちが生命を燃やしながら懸命に生きる姿に出会い、「生命」そのものの尊さを痛感していた。そして、わずかではあるが取り組みによって「重症児」が変化する様子を前に、両者は「重

症児」にとつての「生きがい」を問い続けていた。

「ねたきり」の子どもたちに初めて接した職員たちは、入園した園生をまず知っていくためのケース検討会を重ね、各病棟にふさわしい日課をつくろうと努力した。「この子らの生活をどのようにゆさぶり、そのなかから、この子らのより積極的な意味での生活活動をどのようにひきだしてくるか」(社会福祉法人びわこ学園1983:p.106)(以下、社会福祉法人びわこ学園の出版物からの引用に際しては、(びわこ学園、出版年:頁数)と記載する)、に腐心し、既存の看護や訓練の方法論を当てはめながらも、やはり「この子らの内面に入り込む、いわば『ゆさぶる』」(びわこ学園1983:p.107)方法を探していた。

食事の場面で「抱いたほうがいいのではないか」「ゆっくり時間をかければ食べてくれるのではないか」、入浴の場面で「ふみえさんはお湯の中ではよく足を伸ばす。光子、ほとんど反応はないが湯の中に入るのは好きらしい。まさと、お湯の中に入ると喜ぶ。しもちゃん、ほとんど反応がない。」(びわこ学園1983:p.158)等と、職員は、日常生活の諸場面で示す子どもたちの行動に着目し、「世話活動」のなかでも彼らの要求を受け止めようとしていた。

こうした努力の結果、職員たちは、子どもたちの応え方の「微妙な変化」を発見するようになっていった。そしてそれは、岡崎、糸賀、田中らに新たな「重症児の捉え方」を示唆していく。

田中は、「重症児」に対して初めて「発達の共感」という言葉を用い、「重症児」もそれに取り組む側の人間も、同じ「発達」という次元で「共感」することによって「他の人の何ものにも置き換えがたい主体的な生き方」をしていく。それこそが、「重症児」における「自己実現」であることを指摘した(田中1964:pp.17-20)。

また、これまでの発達過程研究から「発達の質的転換期」という概念と、それを越えられなくても、「その発達段階内での精神薄弱児の個性化の機制」があることを明らかにし、それを表す用語である「1次元」「2次元」という言葉を生み出していた。さらに、「可逆操作」「一次元の可逆操作」「二次元世界の拡がり」という言葉を使って、「わたくしたちは一次元的な可逆操作の世界にも、じつに多様なゆたかさがあることを知ります。次の発達の質的転換期がこえられない時には、この二次元世界の一次元的可逆操作の働きが中心になって、無限の可能性をもった個性化の機制が発動するのです。」(田中1965a〔大泉2011:pp.500-504〕)と述べた。そして『近江学園年報』第11号において、発達の「かべ」は乗り越えられなくても、その段階で「無限の可能性」をもちながら「個性化」が果たされてゆくことを、田中は初めて「横」という言葉を用いて「横へのふくらみ」と述べたのであった(田中1965b:pp.97-104)。それはまさに、「重症児」をも「発達」可能態とみることを可能にする考え方であった。

糸賀もまた、自ら問い続けてきた「重症児」の「生きがい」について、一つの答えを得た。「どんな子どもも発達する。たとえ重症な心身障害のために寝たきりの子どもであっても発達する。」(糸賀1965a:p.3)と、「重症児」の「発達」に確信を持った。そして、それぞれの発達段階にある「無限の可能性」を「豊かにみわたらせること」を発達の「中味」とし、「豊かな人生、生きがいのある人生は、あらゆる現在をそれ自体として充実させることにある。そのことがあふれて次の段階に発達していくような生活であ

らしめたい。」(糸賀1965b:p.8)と述べ、1966年、「横(横軸)の発達」(糸賀1966:pp.14-19)という言葉提起した。

そして岡崎も、「おそらく本当の私達の世界のなかでは『重症児』も私達と同様に生き甲斐をもつに違いない」(岡崎1966:p.1)と確信した。それは、学園の実践において「療育者と児童がより密接な関係場面をもつことが出来れば出来るほど、児童の反応活動は活潑となり、ゆたかになり、生き生きとしたものになる。」(岡崎・小池・森1966:p.38)という事実が証したものであり、これを「“よこ”への無限の育ち」(岡崎・小池・森1966:p.38)と称した。

糸賀は「横(横軸)の発達」を「かけがえないその人の個性」(糸賀1966:p.19)であると述べ、この無限の横軸の充実が人生の充実と一致すると語った。「重症児」の人生には障害克服の努力とともに、今の生活を豊かにするという方向で、無限の発達の可能性に挑戦するという意味があること、それは万人に共通の「人生の価値」であると結論づけたのであった(糸賀1968a:pp.41-46)。また同時に、どんなに重症であっても彼らは「人間と生まれて人間となる」という「自己実現」している、それを通して「社会の変革」を促しているという「重症児の生産性」(糸賀1966:p.19-21)を提起した。そして、「三歳の精神発達でとまっているように見えるひとも、その三歳という発達段階の中身が無限に豊かに充実していく生きかたがあると思う。生涯かかって、その三歳を充実させていく値打ちがじゅうぶんにあると思う。そういうことが可能になるような制度や体制や技術をとのえなければならぬ。」(糸賀1968b:p.177)として「発達保障」の思想を語った。

「横へのふくらみ」を提起した田中は、それを「横への発達」、「ヨコへの発達」と換言した。「たとえ上へのびる方向、すなわち『高次化』が達成されなくても」、同じ「次元」における「ゆたかさ」によって「その人の持ち味が形成されて、他と置き換えのできない人」になることが「ヨコへの発達」であり、それこそが「自己が実現」(田中1966〔大泉2011:pp.622-650〕)することであると述べた。

「ふくらみ」「ゆたかさ」という平仮名を用いて示された対象は、糸賀、岡崎、田中が、1950年代から追究続けてきた子どもの「こころ」や「内面」、「生き方」、そして「自己実現」の姿であったといえる。それは近江学園「杉の子組」での「療養児」への実践、びわこ学園初期の「重症児」への実践で裏付けを得て、「ヨコへの発達」や「重症児の生産性」という言葉に集約された、いわば「発達保障の源流」である。

### 3. 「重症児」療育の深化(1967年～1994年)

1967年、糸賀をはじめとする小林、草野らの尽力により児童福祉法が改訂され、ようやく「重症心身障害児施設」が法的に規定された。

そして創設期の苦闘を経て療育の方向性を見出したびわこ学園では、「重症児」の「発達保障」を掲げて積極的な療育を展開していく。その思想と実践の内実はいかなるものであったのか。ここでは、「重症児」の法的規定後から、「超重症児」と呼ばれる園生を受け入れていくまでの「第一びわこ学園」における療育の思想と実践について詳しくみていく。

# (1) - 1).「療育」の始動と摸索：虚弱児グループの編成

## 【対象者の実態】

「第二びわこ学園」開設（1966年）に伴い、活動量の多い園生たちが「第二びわこ学園」に移動した。こうして「第一びわこ学園」には「ねたきりあるいは動きの小さい児童」（びわこ学園1978：p.9）が在園した。そして、1969年頃からは特に障害が重い「虚弱児」と呼ばれる子どもたちを受け入れるようになっていく。

## 【実践と思想の展開】

「第一びわこ学園」では「ベッド生活からプレイルーム中心の生活へ」「屋内活動中心の生活から、屋外活動中心の生活へ」（びわこ学園1978：pp.83-87）、と目標を掲げ、積極的な療育を展開した。また、療育記録映画「夜明け前の子どもたち」（1967年撮影開始）の撮影中、職員は、これまで「反応」がなかなか捉えにくい園生とされていた「しもちゃん」の「笑顔」に出会い、「コイノボリの場面での子供たちの潜在していた意欲、能力の発見」をした。これらを通して、「ねたきり」の子どもたちには姿勢転換と四肢末端へのリズムを持った働きかけといった「療育内容」と、職員と子どもとの「関係の育ち」が必要不可欠であるということを学び、日中活動の組織化やグループ編成がなされていった。以降の実践の礎石がここで造り出されていったのであった。

園内では「医療と発達」の学習会を重ね、『『消極的健康管理』から『健康増進』へとりくみを転換させていこう』（びわこ学園1978：pp.83-87）と療育の指針を打ち出した。ベッド上で過ごす園生が多い「第一びわこ学園」南病棟でも、1969年より「乾布まさつ」と「水浴」の取り組み、1970年より散歩や行事としての園外活動、運動会への参加を試みた。

ところが、「ベッドからプレイルームへ」「プレイルームから戸外へ」（びわこ学園1978：p.126）と活動を広げていくなかで、子どもによっては発熱が続き、活動に参加できない事態に陥っていった。より虚弱な子どもたちへの療育の在り方が問われたのである。そして、「ベッドで熱と闘っていること自体が子どもたちにとっては健康増進のその時の実践課題」であり、「ベッドに在る生活から快復してプレイルームに出てくる時、どんな成長をしているかを注意ぶかくみていくことが必要」（びわこ学園1978：p.159）であることが確認され、彼らの「全面発達に働きかける療育実践を用意していくこと」（びわこ学園1978：p.159）の必要性が提起された。

これを受けて、ベッドでの健康増進のとりくみが摸索され、更衣や氷枕づくり、清拭も保育といえるのではないかと検討された。また、絶対安静以外の子どもたちには、許される条件のもとで、戸外でできる経験をベッドサイドでも経験できるようベッドサイドでの行事、部屋の装飾などを工夫した。そして1972年には、虚弱な子どもたちを集めた「うさぎグループ」が編成された。

こうした積極的な療育展開の志向は、一方で職員の腰痛症の多発に繋がっていった。職業病による職員不足は深刻なものとなり、更衣や遠足が中止されるなど、子どもたちの生活や療育活動にも影響するまでに至った。

ようやく虚弱児への療育の方向性が見えてきたという職員の意気込みとは裏腹に、この時の職員体制では子どもたちの「全面発達」に働きかける実践を準備することは困難であった。職員不足

と大量の職員の入れ替わりで療育が停滞するなか、子どもたちの変化の実態が十分に押さえることができない状態で、歩ける子を中心に行った食事・排尿指導でさえも継続は困難であった。

# (1) - 2).「療育」の積極的展開：「問題行動を発達要求として」

## 【対象者の実態】

職員体制が試行錯誤された末、「第一びわこ学園」は南北2病棟で構成された。虚弱児たちの「うさぎグループ」のほか、「反応」はあるが「ねたきり」で健康状態が不安定な「つばめグループ」の子どもたち、「くまグループ」の子どもたちで編成された南病棟と、比較的健康状態が安定し、動くことができ、生活の見通しを持つこと等が目標とされる「リスグループ」等で編成された北病棟である（びわこ学園1983：p.170）。

## 【実践と思想の展開】

1973年8月、「第二びわこ学園」では、腰痛による職員不足が深刻となり、「児童の一時家庭引取」（びわこ学園1978：p.95）の方針を出した。これを契機として「第一びわこ学園」でも職員体制を再考し、11月には職員が増員された。これにより、療育活動はぐっと前進した。グループ会議では園生の課題と変化の事実が確かめられ、活動は多様に、戸外へと展開し、行事も発展していった。ケーススタディが実施され、職員の子どもの見る目が深まっていた。

この頃、健康段階別の基礎集団で身体づくりをすすめながら、発達段階で重要な時期にある子どもたちに対しては、基礎集団のなかで課題別グループを編成して計画的に取り組み、グループ活動が活発化した。例えば、北病棟「キリンググループ」では、商店街の買い物がほぼ定期化し、そのほか「リスグループ」の畑の取り組み、「くまグループ」の紙芝居の取り組みなど多彩であった。この課題別グループは、「健康別だけではフォローしきれない。発達に視点をあてた活動」（びわこ学園1978：p.99）をより積極的に行っていくようになり、1975年には病棟全体の課題別活動へと発展していった。

一方、生活基盤をベッドに置く「うさぎグループ」の子どもたちには、「健康増進」を中心にした系統的な実践が開始された。清拭を中心とした日課を組み、生活リズムを確立させ、「ベッド生活における豊かさ」（びわこ学園1978：p.99）を目指していった。「安静」を、ただベッドにおいておくことと捉えるのではなく、「最も快適な状態をつくりだすこと」（びわこ学園1978：p.99）（傍線は原文通り）と積極的に捉え、たとえベッド生活であっても、子どもたちに豊かな表情をつくりだしていった。こうした「健康増進」の実践を通して、職員間では「身体を強くするとりくみは、実は、心に対する働きかけでもある」（びわこ学園1978：p.131）ということが確認されたのであった。

うさぎグループで行われたベッド生活の多様性と豊かさを追求した取り組みは、生活の見直しがなされたこの時期の学園全体のものであった。食事、食器の改善、1日4回の歯磨き、食前の手洗い、陰部清拭の徹底、便秘への取り組み等、生活に関する多くのことに積極的に取り組んだ。子どもたちの生活のきめこまやかなことにも目が向けられ、薄着や「のみもの」の改善、日光浴、食器の改善、夕方の生活を豊かにする取り組み等を行った。

こうした実践のなかで、子どもたちは単にその局面だけの課題を乗り越えることにとどまらず、職員との関係を築き、自らの力をつけていった。また、取り組みのなかで見せる子どもたちの様々な問題行動を「発達要求」として職員が受け止めることができるようになり、「問題行動を発達要求として」（びわこ学園1978：p.160）というスローガンが提起された。

1977年、高谷清医師が着任し、子どもの健康状態をよりきこまやかに把握する体制ができた。職員体制も安定し、充実した取り組みを展開した。また、閉鎖されていた外来診療を再開し、緊急一次保護制度の実施により地域社会のニーズに応じた病棟づくりを目指していった。

## （２）－１）「療育」の深化：「いのち」「快」「関係」の保障の追求

### 【対象者の実態】

1979年、養護学校教育が義務化されたことを背景に、びわこ学園でも、通学する園生が増え、積極的に短期入園、緊急一次保護入園の受け入れを開始した。また、年少で虚弱な重症児たちの入園を多数受け入れ、彼らは「うさぎグループ」に所属した。

### 【実践と思想の展開】

「寝たきり」でより重症な子どもたちで編成された南病棟では、療育目標を「いのちをまもり、いのちをつよめる」「友だちや大人（職員）との豊かな関係をつくりだす」（びわこ学園1981a：p.23）と設定し、生理的基盤の確立と個々のリズムに寄り添いながら調子のよい時に働きかけるといった緻密な取り組みを行った。

この時期の『年報』や「病棟総括集」では、「ひさし君」、「マー君」、「ター君」の事例が度々取り上げられている。

「ひさし君」の事例では、「姿勢を変えたり、触れられるだけで泣き、一旦泣き始めるといつまでも泣き続けるという状態」（びわこ学園1982a：p.44）の彼に対して、職員が啼泣の意味や原因を明らかにし、触れられることに慣れさせようと意識的に身体接触を行った。記録には「快、不快の表情がつかめてきた。快…目をみひらききょんとしたいい表情。不快…泣く」（びわこ学園1981b：p.12）と記されている。その結果、「以前は眠っているか、泣いているかという状態であった彼が姿勢の変化に慣れてくると同時に、泣き方にも甘えたような泣き方、力強い泣き方など変化がみられてきた」（びわこ学園1982a：p.44）という。そして「抱っこに慣れない頃は、頭を撫でる、背中をたたくなどでおさまっていた啼泣も、次第に抱っこに慣れてくると同時に、それだけでは泣きやまず、抱っこすると途端に泣きやむということがみられるようになつた」（びわこ学園1982a：p.44）という変化から、「泣く」ことを「要求表現」として捉えることで、職員との関係が築かれた過程がみえてくる（びわこ学園1981c：p.41）。

「マー君」の事例では、長期にわたる状態悪化、生死の闘いと医療チームによる懸命の救命活動のなかで、職員は、繰り返される彼の不随意運動の強弱に気づいた。この取り組みの過程が「不ずい意運動がつよくなる→体交するとおちつく。咳が集中してくる→オムツ交換をするとおちつくなど、症状としてみていたことが、要求表現ではないか、ということがわかってきた」（びわこ学園1982b：pp.9-10）と記されている。「しんどい中から、マー君自身も、自分の感情や、表情を、発声、啼泣という形であらわすよ

うになった」（びわこ学園1982b：pp.9-10）という捉え直しのもとに、「さまざまな角度から、少しでも楽な方向へと考えた。それがマー君の要求と一致したとき、大きな口をあけて眠りだすという姿が多くなった」（びわこ学園1982b：pp.9-10）という評価がなされた。呼吸停止と必死の救命、人工呼吸が繰り返されるなかで「1秒も目をはなしてられない…苦しい顔、調子の良い顔、おこった顔…その表情をひとつひとつよみとれる関係」（びわこ学園1982b：pp.9-10）が出来ていった過程が克明に記されている（びわこ学園1978：p179）。

「ター君」の事例でも、泣いている原因がつかめず、泣きやませることもできない状態であった彼に、職員は「泣くことを要求表現のひとつだ」と捉え、少しずつ彼の「不快」要因を排除し、「快」をつくりだす取り組みを行った。「不快な啼泣（要求表現としてみる）に対してすぐに接して、不快を取り除こうとした」「身体へのタッチ（抱っこ、ゆさぶり）を増やした」「快適な状態を1日のなかで多くつくる」（びわこ学園1984a：頁数記載なし）といった取り組みの結果、彼は「快」の状態の時に笑顔を見せるようになった（びわこ学園1978：p7）。

こうした事例を通して、療育における思想と実践の方向性として以下の3点が明らかになった。第一に、「生命を守り、健康をつくる」（びわこ学園1978：p9）という「健康増進」の必要性、第二に、身体と心を統合して捉え、活動と安静を通して「快適な状態をつくりだしていくこと」（びわこ学園1978：p9）の必要性である。ここでは「快」を、「主体が外界により能動的に向い働きかけていく、そうした働きの源泉となる心身の状態である」（びわこ学園1978：p106）と捉え、そうした状態を作ることで、例えば、「心地よい風」などを、受け止める能力を広げ豊かにしていく療育を志向した。そして第三に、その過程で築かれる「人」との「共感」を基盤とした「関係」が何よりも重要であり、「関係の育ち」（びわこ学園1978：p200）と方向を支えていくことの必要性であった。

こうした思想と実践のもとでは、例えば「笑顔」の獲得を、単に子どもの発達段階における目的としての「笑顔獲得」と捉えるのではない。子どもが「人」と結びつく手段として「笑顔」を捉え、そのとき療育目的は「外界からの働きかけをうけとめ、それと結び目をつくって反応するという構造全体を確立すること」（びわこ学園1978：p200）とした。学園では、年少虚弱児への実践を通して、「発達の一側面を唯一の目的とする」（びわこ学園1978：p200）ことを自戒したのであった。

高谷が園長に就任した1984年、5年間に渡って討議が続けられてきた将来構想検討委員会が最終答申を提起した。それは、新しい「第一びわこ学園」の将来構想・移転を見越した欧州視察の経過を踏まえ、できるだけ社会の一般的な生活形態に近づけるような「生活の視点」（びわこ学園1984b：p8）を重視したものであった。国際障害者年（1981年）を契機として世界中に広がった「ノーマライゼーション」の理念が「第一びわこ学園」でも具現化されようとしていた。

## （２）－２）．「療育」の広がり：「いのち」を守ることの再確認と「ふつうの生活」の追求

### 【対象児の実態】

1980年代後半からは、入園・在園者の重度化が進行し、健康状態が不安定な園生や「最重度といわれる園生」（びわこ学園1989：p.13）を抱えるようになる。また園生の手術や栄養チューブ挿入術等、医療的介入が必要なケースが目立つようになっていく。

### 【実践と思想の展開】

こうしたなか、北病棟では「難しい」「関係がつきにくい」といわれる園生のつかみ直しを行い、彼らとの信頼関係を作りながら発達要求に応えようとしたとりくみを行った。南病棟では、引き続き発作、筋緊張、不随意運動等様々な「不快」な思いをしている園生たちに「共感」し、少しでも「快適」な状態になれることを指向したとりくみに力を注いだ。両病棟の実践のキーワードは「生活をゆたかに」であった。

この時期、幼い二人の園生の死を経験した南病棟では、いのちが燃え尽きるその時まで続けられた彼らへの療育から、再度「いのちを守る」ことの重要性を再確認した。これまで「健康増進」として積極的に取り組んできたこと、すなわち乾布マサツ、日光浴、外気浴、経管栄養から経口摂取へのとりくみ等「私たちのとりくみに、子どもたちはついてこれるのだろうか…。生きる最低の条件さえ整っていない子どもたちに、めまぐるしい1日の流れは、オーバーワークではないか」（びわこ学園1985：pp.5-6）と自省されたのである。「健康増進のように鍛錬することも必要であるが、そこまでの基盤がしっかりとできていない場合は、生理的な基盤をいかに保つことができるか——快適に生活できるのか」（びわこ学園1985：pp.5-6）を追求していくことが第一義であると職員間で合意がなされた。そして、そのために日課表には「安静と活動のリズムをつくること」（びわこ学園1986：p.14）が明記されたのであった。

「M君の苦しさを受け止め、表情、手足のひとつひとつの動きに、全神経を集中させてきた。その中からM君の新たな力をみつけだし、状態が回復していく時、“M君の思い”が少しずつわかるようになった」（びわこ学園1989：p.7）と記された闘病記録からは「いのち」の闘いとそれを24時間支え続けてきた職員たちの姿が痛切に伝わる。そして「障害が重くても、虚弱であっても、発達レベルが低くても、苦しいこと、死にたちむかい、闘っていることに共感すること」（びわこ学園1986：p.14）こそが「療育」なのであると職員間では確認された。それは園生の重度重症化が進行する「第一びわこ学園」の「いのちを守る」という療育理念を決定づけるものであった。

1987年、岡崎英彦初代園長が逝去した。この年、琵琶湖一周を25万人で手をつなぐ「抱きしめてBIWAKO」<sup>4)</sup>が成功した。びわこ一周を人の手をつないで、生命の象徴ともいえる「びわこ学園」と、いのちと自然を象徴する「びわ湖」を同時に抱きしめようという趣旨のもとで、約21万3,000人が参加した（びわこ学園1988a：pp.2-3）。

こうしたイベントの成功を受けて、新築移転に向けての準備が本格的に進行した。移転構想のなかで「ふつうの生活を社会の中で」という大きな基本理念を掲げて、その実現に向けて各病棟の

療育が展開された。北病棟では、集団編成をより小集団化し、移転に向けて「ホーム制」<sup>5)</sup>の実現を目指し、「ふつうの生活」により近づけるための環境設定がなされた。南病棟では、慢性的な看護師不足に悩まされながらも、移転後の生活を想定して日課の見直し等を行った。移転後は医療を重視した生活棟である「メディカルホーム」（びわこ学園1990a：pp.2-3）が想定され、南北病棟ともに医療と生活の両方を保障することを目指していった。

このような取り組み、体制を継続・発展させていくなかで、「重症児にとって、ふさわしい生活とはなにか・ふつうの生活とはなにか」（びわこ学園1988b：p.11）を追求することを中心的な課題に据えた。そのために、園生たちが「くらしの主人公」（びわこ学園1989：p.26）になれるような、生活を主体的に切り開いていけるような場面や時間が考案された。北病棟では、移転後の「ホーム制」のために「日中の生活をより豊かに」（びわこ学園1990b：p.18）、職員体制を工夫して朝夕の生活をふくらますよう工夫した。さらに重度化が進んだ南病棟では、「命を守ること、生活を豊かにすること」（びわこ学園1991：p.17）の二本立ての療育目標のもと、実践を展開した。

「重症児」であっても、「ふつうの生活を社会のなかで」（びわこ学園1988c：p.42）という移転構想の理念には、「どんな重い障害の子も、みんな人間としての発達のみちゆきを歩む。のびる主体、暮らしの主人公へ」（びわこ学園1991：p.17）と、「重症児」観の転換の意味が込められていたのであった。

そして1991年、「第一びわこ学園」は草津へ移転した。医師および多彩なコメディカルスタッフによる充実した医療体制で病棟運営や外来診察を行い、新たに4名の最重度児を受け入れた。ところが、看護師の不足で3棟のうち2棟のみでスタートとなった。移転後の1～2年は園生の重度化が予想以上に進行し、「重症児」者に人手がとられ、比較的健康が落ち着いているグループは活動どころか生活のきりまわしが精一杯となった。ようやく看護師が確保され、3病棟体制が実現したのは1993年に入ってからであった。1994年には移転以来悪化していた財政がようやく確立した。

## 4. 「超重症児」を含んだ療育（1995年～2014年）

1990年代に入ると、新生児医療や救命救急医療技術の進歩により、濃厚医療、濃厚介護が継続して必要な最重度の障害児が増加し、その処遇が各地で大きな課題となった。これに対して1995年、先述のとおり鈴木はわが国で初めて「超重症児」を定義した。この前年に「第一びわこ学園」においても「超重症児」を受け入れている。ここでは、「超重症児」の定義づけ（1995年）から現在に至るまでの「第一びわこ学園」の思想と実践について検討する。

### 【対象者の実態】

「超重症児」の受け入れを皮切りに、呼吸困難を伴う「超重症児」に加えて退行性疾患等のターミナル支援、高齢による機能低下への対応等、「第一びわこ学園」の対象とする園生は質的に大きく変化していった。1990年代後半からは年報の各年のケース報告に「呼吸障害」、「脳出血」、「人工呼吸器」、「気管切開・十二指腸栄養」等の医療用語が並び、園生の重症化進行を如実に表した。

### 【実践と思想の展開】

移転直後の多忙と看護師不足の状況下においても、長期ベッド

生活者には生きる意欲を絶やさないための療育が続いた。1994年、年報のケース報告では初めて「QOL」（びわこ学園1995：p.33）（Quality Of Life）という用語が登場している。報告では、度重なる呼吸障害に苦しんでいた「N君」に対して、気管切開という医療的選択を下すまでに、家族と職員が、「N君」の「QOL」向上のための援助方法を探った過程が記されている。

「スヌーズレン」<sup>6)</sup>を導入した1998年のケース報告では、退行性疾患の「Tさん」への取り組みが報告された。そこでは、わずかな刺激や関わりでさえも緊張・不快へと結びつく「Tさん」に対して、状態の悪化防止に務めるだけでなく、彼女にとって質の高い、充実した生活に向けたとりくみをし、「身体的に安全で安楽な状態を提供すると共に精神的に快適で、毎日が意味のある生活を送れるような援助を行うことの重要性」（びわこ学園1999：p.40）を確認した。濃厚な医療的支援を得ながらも「よりよく生きていく」（びわこ学園2002：p.28）ための療育実践が展開されたのであった。

2000年代に入り、さらなる重度重複化の波が押し寄せたが、最重度の利用者で編成される第1病棟では「どんなに障害が重度であっても個々の利用者と家族とともに自己実現にむけて医療・生活の充実を図る」（びわこ学園2002：p.28）ことに重点目標を置き、療育を展開した。

そして2002年、新しく「びわこ学園の理念」が提起された（資料1）。翌年からは本人・家族参画、承認による「個別援助プログラム」を導入し、療育システムを整備した。この時期、人工呼吸器使用者は7名、「超重症児」者15名、「重症児」者15名（2003年）となり、ますます重度重症化が進行した。自立支援法（2006年）施行後も、びわこ学園では児童福祉法の重症児施設サービスを継続した。また、診療報酬が大幅に改定され、病棟基準を再編した。こうした大きな医療と福祉制度改革のなか、事業・運営を進めるための組織的対応として、「第一びわこ学園」は「びわこ学園医療福祉センター草津」と名称を変更した。

「びわこ学園の理念」の提起後は、理念にある「いのち」「ふつうの生活」「まちづくり」をキーワードに療育を展開していった。例えば、最重度の障害があり常に医療的ケアを必要とする子ども、成人の多い第1病棟では、「どんなに障害の重い人たちであってもそれぞれに『生活の楽しみ方はある』」（びわこ学園2003：p.33）を療育目標に、人権を守り、安全でより快適な生活の保障を目指していった。個別性を尊重した活動展開や外出の幅を膨らませて花火、クルージング体験、買い物、夕食をかねてのコンサート等、「日中活動の充実」として月1～2回の班活動を実施し、それぞれ

#### びわこ学園の理念

（2002年9月27日）

障害の重い人たちの生活の創出と幸福を追究してきたびわこ学園の創設者、糸賀一雄は「この子らを世の光に」と提唱しました。びわこ学園はその意義を自覚し、障害の重い人たちが市民として生きる社会を目指します。

- 1 一人ひとりの尊厳を重んじ、他とおきかえることのできない「いのち」を支えます。
- 2 その人らしさが輝く、「ふつうの生活」をおくることができるよう支援します。
- 3 障害のある人たちが安心して暮らせるまちづくりをすすめます。

#### 資料1：「びわこ学園の理念」

出典：社会福祉法人びわこ学園（2003）『びわこ学園年報 2002年度報告』2002年度びわこ学園年報編集委員会編、p.4.より筆者作成、転載

が「主体的に取り組める場」となるように創意工夫された。

常に誰かが体調を崩し、利用者の重症化がさらに進行した2000年代後半には、医療的ケア、介護負担の増加と職員体制の不安定さから日中生活を変更せざるを得ない状況にも陥った。利用者はベッドサイドでパジャマで過ごす時間が増えたが、それでも外出とサークル活動は継続され、「生活の質」（びわこ学園2008：p.26）を保障し余暇を楽しむ活動を通して、「利用者一人ひとりの自己実現」（びわこ学園2010：p.34）を指向した。

2010年代には、第1第2病棟とも医療必要度がますます高まり、特に第1病棟では半数以上が「超重症児」者となった。2013年、創立50周年を迎えたびわこ学園の記念誌には、35歳になった「ター君」の事例が掲載されていた。「年少虚弱児」として入園した「ター君」（本稿 p.21）は、学童期、青年期を経て一人の青年として力強く生き、社会生活を広げている。その間、呼吸機能の悪化やてんかん重積発作、骨折の繰り返し等、加齢に伴って様々な身体的不調や苦痛を経験した。その度に、さまざまな医療的支援を受けながら、そして何より職員との「共感」関係を深めながら、離床や経口摂取に挑戦し、少しずつ生活の幅を拡大させている。担当した職員は、こうした「ター君」の「自己実現」の姿をびわこ学園の50年のあゆみに重ねて「決して命をあきらめない、そのサポートをする職員が気持ちを一つにして取り組んだ協働の財産」（びわこ学園2013：p.141）であると結んだのであった。

#### 5. おわりに：総合考察と今後の課題

本稿で分析対象とした「第一びわこ学園」公刊の『年度報告』『年報』『記念誌』及び「びわこ学園便り」をPDF化して「発達保障」（または「発達の保障」）の用語で検索をかけると、1960年代は「びわこ学園便り」に5回表記がされていた。そして、その後の『年度報告』や『年報』では、記載がほぼなくなっていく<sup>7)</sup>。「第一びわこ学園」において、「発達保障」は用語自体としては、当初から表立ってはあまり多用されておらず、また後にはほとんど記載されなくなってきたのである。ただし、そのことをもって「発達保障」の思想と実践が「第一びわこ学園」に位置づいていないと結論づけることは早計であろう。

近江学園による1961年の「発達保障」の提起前後から、糸賀をはじめとする近江学園・びわこ学園の関係者は、国や県、そして学界から非常な圧殺を受けていた。1960年、近江学園は行政監査を受け、さらにびわこ学園発足前に、「発達保障の考えは国の方針とは相容れない」（田中1956〔大泉2011：pp.101-106〕）と厚生省から口頭指導を受ける。これを受けて糸賀は、1964年以降近江学園からの刊行物においては「発達の権利を保障する」（糸賀1964b：p.12）<sup>8)</sup>と、「権利」の用語を入れ、「発達保障」を一人ひとりの「権利」として普遍的なものとして提唱するようになったと田中は指摘する（田中1997〔大泉2011：p.805〕）。一方で、園内向けの研修会等では、糸賀は「発達保障」の追究を呼びかけ、晩年の著作『この子らを世の光に』（糸賀2013：p.307）や『福祉の思想』（糸賀1968b：p.177）において「発達の保障」を力強く提起している。ここに、「発達保障」をめぐる糸賀の苦闘と葛藤がみえてくる。こうした糸賀の苦悶も含めて、現場の職員たちは受け止め、継承しようとしたのであろう。

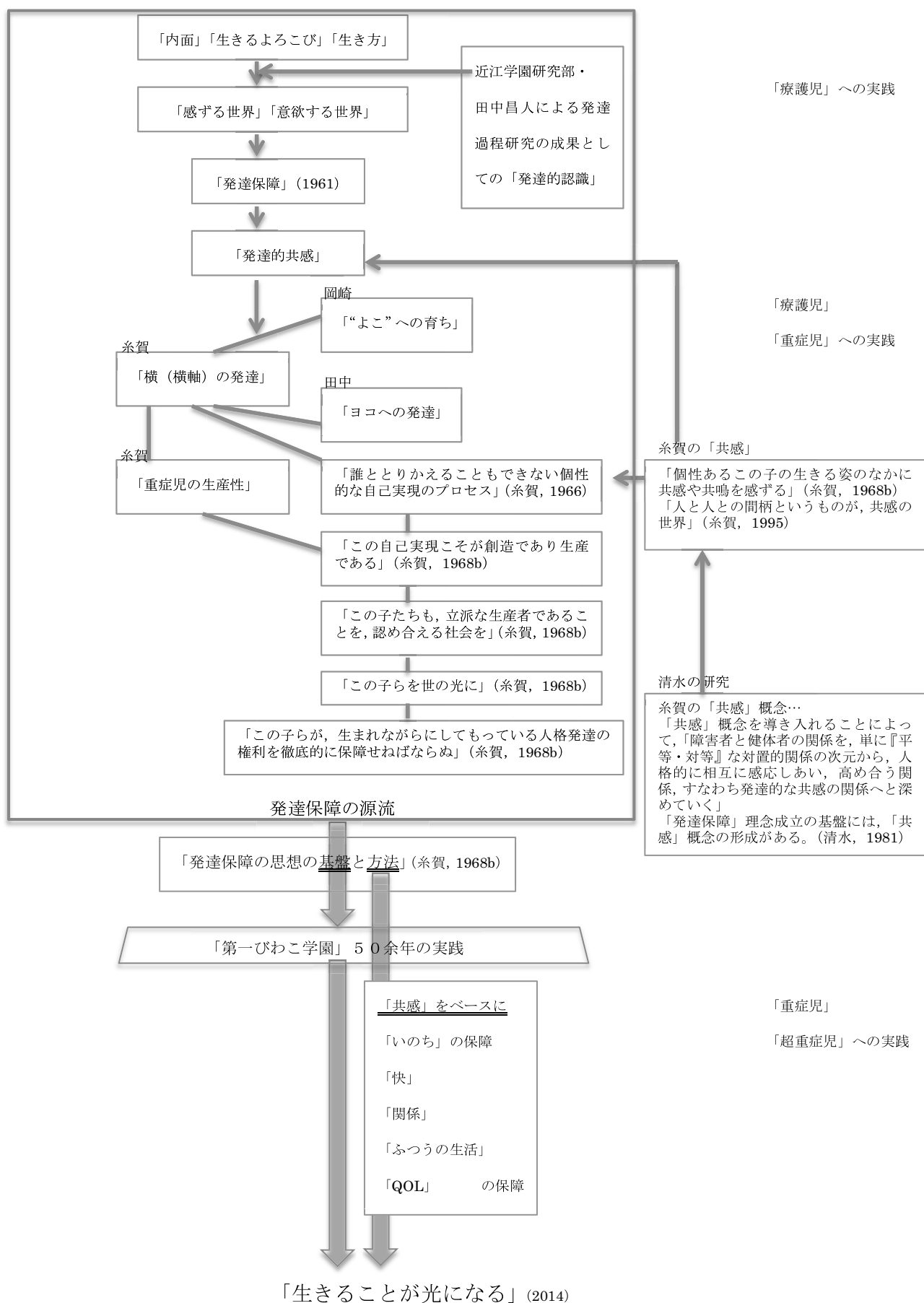


図1 「発達保障」の源流と「第一びわこ学園」50余年

創設期の「びわこ学園便り」に表記される「発達保障」<sup>9)</sup>や、びわこ学園の三年間の歩みをまとめた『心身障害者福祉問題研究叢書第1集』のなかの「発達保障への指向」(岡崎・小池・森1966:p.38)には、びわこ学園が「発達保障」の思想や理念をもとにして出発しようとしたことが現れている。しかし、行政側の圧力は強く、同書『第2集』刊行の際には、「発達保障」の論者であった田中昌人らの論考が別冊扱いとなり(1968年)、発行元である心身障害者福祉問題総合研究所は1969年には行政指導により解散させられている(田中1997[大泉2011:p.823])。その後、「びわこ学園便り」は休刊となり(前掲表1)、『年度報告』でも「発達保障」の表記はみられなくなる。

びわこ学園黎明期のこうした経緯も含めて、「第一びわこ学園50余年」の療育実践史を分析してみると、苦境のなかにあっても自らの実践から生まれた事実に確信をもって糸賀が述べた「発達保障の思想の基盤と方法」(糸賀1968b:p.172)は、実践のなかで摸索されながらも確実に貫かれたと言える。

近江学園時代の「療護児」やびわこ学園創設初期の「重症児」への実践において、糸賀、岡崎、田中らは「発達保障」思想を共創する過程で「内面」「生きるよろこび」「生き方」「自己実現」の追求を出発点とした。三者は「ヨコへの発達」(「横(横軸)の発達」)という考え方を共創し、糸賀は「重症児の生産性」を提起した。さらに糸賀は、重症の「この子ら」の「自己実現」の追求を通して社会の変革を促そうと希求し、「この子らを世の光に」という言葉を遺した。こうした「発達保障の源流」は、今なお、「発達保障の思想」の「基盤」として「第一びわこ学園」に流れ続けている。また、「第一びわこ学園」では、「共感」の姿勢を重症児への「発達保障の思想」の「方法」として中心に据えながら、「いのち」「快」「関係」「ふつうの生活」「QOL」という新たな概念を含みこんで具現化していった。そして、今では「生きることが光になる」と要約されているとみてよい(図1)。

最後に、今後の研究課題を挙げる。第一に、1966年に創設され、同じ「発達保障」の理念のもとで実践を展開した「第二びわこ学園」の療育実践史について検討すること、第二に、「びわこ学園」実践の内実を当事者の立場から解明するために、家族や職員への聴き取り調査とその分析が残されている。

#### 《註》

- 1)『近江学園年報』第9号の奥付は1960年とされているが、「発達保障」が提起された論考は1961年に執筆されたことが判明している。この詳細については、田中昌人(1997)「全障研の結成と私の発達保障論」全国障害者問題研究会編集・発行『全障研三十年史』pp.439-575、大泉博編(2011)『日本の子ども研究——明治・大正・昭和——第13巻、田中昌人の発達過程研究と発達保障論の生成』クレス出版、p.762に記載されている。
- 2)『近江学園年報』第7号、1955年、p.108に記載。
- 3)秋津療育園が設立されたのは1958年11月であり、島田療育園の発足よりも3年ほど前のことであった。従って、わが国初の重症児施設は、実態としては秋津療育園ということになる。しかし、秋津療育園は施設定員の最低基準を満たすことができなかったことや発足の際に法人化せず、児童福祉法の改正を主張

したこと等の理由で正式な重症児施設としての発足が遅れ、1964年ようやく国の委託指定施設となった(草野1983:pp.203-207)。

- 4)抱きしめて「BIWAKO」とは、1987年11月8日212,900人の参加と資金・メッセージの参加51,300人(計264,200人)で、琵琶湖一周を人の手でつなぐことに成功したイベント。参加者は一人千円の参加費を持参し、集まった資金の一部は「第一びわこ学園」の新築移転費用に寄付された。
- 5)「ホーム制」とは、高谷が1982年の欧州訪問で視察した障害児施設での生活の様子をならった「小部屋・小単位制」のこと(社会福祉法人びわこ学園(1991)「移転新築への歩み」『びわこ学園年報 1990年度報告』1990年度びわこ学園年報編集委員会編、社会福祉法人びわこ学園、p.10.)
- 6)スヌーズレンとは、1970年代後半にオランダの重度知的障害者施設で開始されたとりくみで、次のような特徴がある。①重い障害のある人が心地よい雰囲気の中で視覚・聴覚・嗅覚・触覚など多様な刺激を楽しめる環境を提供する②その環境のなかで、障害者がどのように刺激を受け止めているか、ありのままの姿を職員は見ている。そこで、障害者と援助者は、同じ時間を共有し、同じ刺激を楽しむ仲間となる③スヌーズレンは指導や援助を行う治療方法や教育プログラムではなく、「こうしたしなければならない」というきまりはない。(社会福祉法人びわこ学園(1999)「スヌーズレンの取り組みから見えてきた重い障害を持つ人々の姿」『びわこ学園年報 1998年度報告』1998年度びわこ学園年報編集委員会編、社会福祉法人びわこ学園、p.41.)
- 7)『記念誌』に限っては、1960年代を振りかえる時等に、当時使用されていた言葉として出現が見られる(『15周年記念誌』に1回、『20周年記念誌』に5回、『50周年記念誌』に20回)。
- 8)『近江学園年報』第10号は、奥付が1963年3月31日となっているが、糸賀は1964年3月末日の日付でこの論考を記載している。この詳細については、田中(1997)、大泉博編(2011)p.777に記載されている。
- 9)「びわこ学園だより」における「発達保障」の表記…①糸賀一雄(1964)「静かなる迫力」No.1、p.2②糸賀一雄、岡崎英彦他(1965)「座談会 二年のあゆみ」No.3、p.5.③岡崎英彦他(1965)「座談会 療育体制とその課題」No.5、p.7.④岡崎英彦(1966)「第二びわこ学園の発足に際して」No.6、p.1.⑤糸賀一雄、岡崎英彦他(1966)「座談会 もっと協力的な対策の推進を」No.6、p.3.

#### 【文献一覧】

- 市原邦雄(1974)「施設の療育実践と発達——重症心身障害児施設から——」『障害者問題研究』、第2号、pp.74-87.
- 糸賀一雄(1955)「まえがき」『近江学園年報』第7号、頁数なし.
- 糸賀一雄(1958)「当面の諸問題」『近江学園年報』第8号、pp.1-17.
- 糸賀一雄(1963)「発達の保障」『教育時報』第14巻6号、pp.13-16.
- 糸賀一雄(1964a)「静かなる迫力」『びわこ学園だより』創刊号、p.2.

- 糸賀一雄 (1964b)「十五年目をむかえた近江学園」『近江学園年報』第10号, p.12.
- 糸賀一雄 (1965a)「ゆたかな発達を」『滋賀社会福祉』第83号, p.3, 糸賀一雄著作集刊行会編 (1983)『糸賀一雄著作集Ⅲ』日本放送出版協会, p.349.
- 糸賀一雄 (1965b)「指導体制評価についてのわれわれの立場」『近江学園年報』第11号, p.8. 糸賀一雄 (1966)「この子らを世の光に (二) ——重症心身障害児の生産性について」『両親の集い』第128号, pp.14-19.
- 糸賀一雄 (1968a)「障害児をもった親の心の支え」『まみず』第3巻第9号, pp.41-46.
- 糸賀一雄 (1968b)『福祉の思想』NHK 出版, p.177.
- 糸賀一雄 (1995)『愛と共感の教育』柏樹社, p.33.
- 糸賀一雄 (2013)『復刊 この子らを世の光に 近江学園20年の願い』NHK ブックス, p.307.
- 因幡一碧 (1956)「教育の本質」『手をつなぐ親たち』第4号, pp.2-4. (因幡一碧は糸賀一雄の筆名である)
- 遠藤六朗 (2006)「重症心身障害児療育における『発達』検討——事例を物語として再構成することを通して——」『滋賀文化短期大学紀要』第16号, pp.57-72.
- 岡崎英彦 (1955)「療護クラス『杉の子』——ノイローゼ, アテトローゼ, テンカンの子ら——」『近江学園年報』第7号, pp.108-133.
- 岡崎英彦 (1958)「精神薄弱児の指導について」『両親の集い』第34号, p.7.
- 岡崎英彦 (1964)「ごあいさつ」『びわこ学園だより』創刊号, p.1.
- 岡崎英彦 (1966)「広さと狭さと」『びわこ』第11号, p.1, 岡崎英彦著作集 (1990) 医療図書出版社, p.228.
- 岡崎英彦 (1978)「びわこ学園十五年」『障害児と共に三十年』医療図書出版社, p.66.
- 岡崎英彦, 伊藤貞子, 岩村寿子, 横田とし江 (1958)「療護児童の記録」『近江学園年報』第8号, pp.151-181.
- 岡崎英彦, 小池清廉, 森敏樹 (1966)「重症心身障害児療育の基本的問題」『心身障害者福祉問題研究叢書第1集』心身障害者福祉問題総合研究所, p.38.
- 小林提樹 (1959)「ただ秋風の吹くばかり」『両親の集い』(日赤・両親の集い) 第46号, p.3.
- 草野熊吉 (1983)「秋津療育園誕生のころ」『この子たちは生きている』ぶどう社, pp.203-207.
- 斉藤文夫 (1977)「重症心身障害児施設・第一びわこ学園の実践——健康と発達を保障するとりくみ——」浦辺史, 積惟勝, 奏安雄編『新版 施設養護論』ミネルヴァ書房, pp.1-9.
- 清水寛 (1976)『『発達保障』理念の形成——糸賀一雄の福祉思想を中心に』, 吉田久一編著『戦後社会福祉の展開』ドメス出版, pp.435-516.
- 清水寛 (1978)「障害児の発達保障の思想——糸賀一雄の『発達保障』の理念」『障害児教育の基本問題』福村出版, pp.38-66.
- 清水寛 (1981)『『発達保障』理念の形成——糸賀一雄の福祉思想を中心に』『発達保障思想の形成』青木書店, pp.157-248.
- 清水寛 (2013)「糸賀一雄の福祉思想の生命力」『糸賀一雄生誕100周年記念論文集』糸賀一雄生誕100周年記念事業実行委員会, p.184.
- 社会福祉法人びわこ学園 (1978)『創立15周年記念誌 びわこ学園の15年 1963-1978』15周年記念誌編集委員会編, 社会福祉法人びわこ学園.
- 社会福祉法人びわこ学園 (1981a)「55年度の特徴」『昭和55年度報告』昭和55年度報告編集委員会編, 社会福祉法人びわこ学園, p.23.
- 社会福祉法人びわこ学園 (1981b)「うさぎグループ総括」『1980年度病棟総括集』, p.12, 未公開資料.
- 社会福祉法人びわこ学園 (1981c)「ケース報告」『昭和55年度報告』昭和55年度報告編集委員会編, 社会福祉法人びわこ学園, p.41.
- 社会福祉法人びわこ学園 (1982a)「'81うさぎ」「1981年度病棟 総括集」, p.44, 未公開資料.
- 社会福祉法人びわこ学園 (1982b)「1981年度 うさぎグループ まとめ」「1981年度病棟総括集」, pp.9-10, 未公開資料.
- 社会福祉法人びわこ学園 (1983)『創立20周年記念誌 びわこ学園の20年 1963-1983』20周年記念誌編集委員会編, 社会福祉法人びわこ学園.
- 社会福祉法人びわこ学園 (1984a)「いのちを守りいのちを強める」『みなみ1983年度総括集』, 頁数記載無し, 未公開資料.
- 社会福祉法人びわこ学園 (1984b)「びわこ学園 (第一ブロック) 将来構想 (最終) を答申」「びわこ学園だより」第26号, p.8.
- 社会福祉法人びわこ学園 (1985)「1984年度 うさぎグループ総括」「1984年度南病棟総括集」, pp.5-6, 未公開資料.
- 社会福祉法人びわこ学園 (1986)「生命を守り, 生命を強めるとりくみ」『びわこ学園年報 1985年度報告』1985年度びわこ学園年報編集委員会編, 社会福祉法人びわこ学園, p.14.
- 社会福祉法人びわこ学園 (1988a)「抱きしめて BIWAKO『生命, 自然』に21万人の輪」「びわこ学園だより」第37号, pp.2-3.
- 社会福祉法人びわこ学園 (1988b)「1987年度の療育」『びわこ学園年報 1987年度報告』1987年度びわこ学園年報編集委員会編, 社会福祉法人びわこ学園, p.11.
- 社会福祉法人びわこ学園 (1988c)「未来へ, そして問われるもの」『びわこまんだら びわこ学園25周年記念誌』, 社会福祉法人びわこ学園 p.42.
- 社会福祉法人びわこ学園 (1989)「1989年度の療育」『びわこ学園年報 1988年度報告』1988年度びわこ学園年報編集委員会編, 社会福祉法人びわこ学園, p.13.
- 社会福祉法人びわこ学園 (1990a)「あんなことできたらいいな」『びわこ学園だより』第45号, pp.2-3.
- 社会福祉法人びわこ学園 (1990b)「1989年度をふりかえって」『びわこ学園年報 1989年度報告』1989年度びわこ学園年報編集委員会編, 社会福祉法人びわこ学園, p.18.
- 社会福祉法人びわこ学園 (1991)「1990 (平成2) 年度をふりかえって」『びわこ学園年報 1990年度報告』1990年度びわこ学園年報編集委員会編, 社会福祉法人びわこ学園, p.17.
- 社会福祉法人びわこ学園 (1995)「もっと輝かせたい この命」『びわこ学園年報 1994年度報告』1994年度びわこ学園年報編集

- 委員会編，社会福祉法人びわこ学園，p.33.
- 社会福祉法人びわこ学園（1999）「退行性疾患をもつ患者を通して考える，重症心身障害者の看護」『びわこ学園年報 1998年度報告』1998年度びわこ学園年報編集委員会編社会福祉法人びわこ学園，p.40.
- 社会福祉法人びわこ学園（2002）「療育実践」『びわこ学園年報 2001年度報告』2001年度びわこ学園年報編集委員会編，社会福祉法人びわこ学園，p.28.
- 社会福祉法人びわこ学園（2003）「療育実践」『びわこ学園年報 2002年度報告』2002年度びわこ学園年報編集委員会編，社会福祉法人びわこ学園，p.33.
- 社会福祉法人びわこ学園（2008）「5 病棟の概要」『びわこ学園年報 2007年度報告』2007年度びわこ学園年報編集委員会編，社会福祉法人びわこ学園，p.26.
- 社会福祉法人びわこ学園（2010）「5 病棟の概要」『びわこ学園年報 2009年度報告』2009年度びわこ学園年報編集委員会編，社会福祉法人びわこ学園，p.34.
- 社会福祉法人びわこ学園（2013）「医療ニーズの高い利用者への支援の展開 ただしさんの20年のあゆみから」『社会福祉法人びわこ学園 50周年記念誌』社会福祉法人びわこ学園，p.141.
- 鈴木康之・田角勝・山田美智子（1995）「超重度障害児（超重障児）の定義とその課題」『小児保健研究』第54号，pp.406-410.
- 田中昌人（1956）「精神薄弱児の三つの願い」『南郷』第17号，大泉溥編（2011）『日本の子ども研究——明治・大正・昭和——第13巻，田中昌人の発達過程研究と発達保障論の生成』クレス出版，pp.101-106.
- 田中昌人（1961）「研究部のあゆみ」『近江学園年報』第9号，p.223.
- 田中昌人（1964）「重症心身障害児の発達——1——」『愛護』第82号，pp.17-20.
- 田中昌人（1965a）「重度精神薄弱児の発達——2——」『愛護』第87号，33-36，大泉溥編（2011）pp.500-504.
- 田中昌人（1965b）「第一教育部の活動——これからの指導のふかまりのために——」『近江学園年報』第11号，pp.97-104.
- 田中昌人（1966）「すべての子どもの発達の権利をかちとるために——新しい『心身障害児の発達と教育』の理論」大阪京都滋賀発達保障研究会編，大泉溥編（2011）pp.622-650.
- 田中昌人（1997）「全障研の結成と私の発達保障論」全国障害者問題研究会編集・発行（1997）『全障研三十年史』，大泉溥編（2011）pp.747-830.
- 田中昌人（2006）「土入れ，麦踏み」京都大学教育学部第二期生有志（編）『あの頃の若き旅立ち教育・研究・生活』クリエイツかもがわ，pp.79-114.
- 森敏樹（1971）「問題になる子の保育実践課題」『朝倉保育基礎講座 6 問題になる子』，川端利彦編，朝倉書店，pp.138-161.
- 森博俊（1982）「障害の重い子どもの教育（療育）実践とその目標」『障害者問題研究』第29号，pp.21-33.